

# 清末小説から 99

2010.10.1

『繡像小説』問題2 .....樽本照雄 1

《老殘遊記》婦女形象及太谷學派婦女觀淺析.....朱 松齡 6

《法蘭西之魂》の原作.....渡辺浩司13

張坤德是《時務報》福爾摩斯故事的唯一中譯者嗎？.....郝 嵐20

《冲积期化石》決非新文學史上第一部長篇小說.....王 金城24

晚清小説作者掃描（貳拾肆）.....武 禧29

清末小説から31

『清末小説』第33号を發行しました。その目次は、本誌32頁に掲載しております。ご覧〴〵

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

## 『繡像小説』問題2

樽 本 照 雄

本稿は、「『繡像小説』問題」（『清末小説から』第96号）のつづきである。

汪家熔は、別の箇所ですら次のように説明する。「『繡像小説』ははじめから李宝嘉と彼の学生欧陽鉅源の天下だった[《繡像小説》一開始就是李宝嘉和他学生欧陽

鉅源的天下]」（341頁）

雑誌に小説を掲載するとき、その実際の担い手、書き手は職業作家だという文脈で出てくる。汪家熔は李伯元（宝嘉）主編説を否定している。そうすると、上の説明とはどうつながるのか。汪家熔が特定することのできない姓名不明の人物が『繡像小説』の主編をつとめており、それとは別に主要な書き手が存在した。作家たちは李伯元と欧陽鉅源だった、と言いたいのだろうか。汪家熔は、『繡像小説』の編集部と主要作家としての李伯元たちを切り離しているようにも読める。それで李伯元らの「天下」だということも腑に落ちない。

私は先に、『繡像小説』は商務印書館の刊行物でありながら、編集体制は独立していたと書いた。それと、汪家熔の説明は似ているようで内容は異なる。汪家

熔がいうのは、『繡像小説』の司令部としての編集部が商務印書館のなかになって、書き手はそれとは関係のない職業作家の李伯元たちだったというだけのこと。発行と編集の主体は商務印書館にあると考えているのだろう。念のためだが、書き添える。私が商務印書館の広告から読み取るのは、商務印書館は『繡像小説』の発行元ではあるが、編集の責任は李伯元にあるということだ。それなら、「天下」だったという表現に一致する。発行と編集は別である。

発行遅延を視野に入れると『繡像小説』の編者問題は少し複雑になる。刊行途中で李伯元が死去する。単純であるわけではない。

『繡像小説』創刊から李伯元が主編をつとめていた。版元商務印書館の自社広告は、そのことを宣伝している。しかし、彼の死後も『繡像小説』は刊行され続けている。ならば、臨時に(正式か臨時かの区別はつかないが)主編を引き継いだ人物がいるはずだ。李の協力者であった欧陽鉅源をおいて別人はいない。第55期から終刊の第72期まで。時間でいえば、1906年六月から同年年末までの約半年間である。

『繡像小説』の編者問題と切り離せないものとして盗用問題がある。汪家熔と論争をはじめた最初から私はこれを提起している。

いい機会だ。問題を整理しなおして説明する。

まず、『繡像小説』の主編は李伯元だった事実を前提にする。問題を複雑にし

ているのは、詳細不明の部分があり、しかも『繡像小説』の刊行時期という肝心の基本部分が動いたからだ。すなわち、上記のように刊行が遅延していた。それに従い私の考えも最初のものから変化している。上の部分でいえば、主編は李伯元から欧陽鉅源に引き継がれたという箇所だ。事実を押さえながら解説する。

何が問題になっているのか。基本を示す。

さかのぼれば1903年から1906年頃までの事である。

劉鉄雲が単行本で出した『老残遊記』第11回と『繡像小説』に掲載された南亭亭長「文明小史」第59回に内容が同じ部分がある。当時の中国の社会状況を書き込み、北の義和団、南の革命(これを「北拳南革」という)を批判する箇所だ。

別々の2作品に、同じ内容の同じ文章がある。偶然に一致したものとは考えられない。劉鉄雲か、あるいは南亭亭長が、文章を盗用したことになる。これが、「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題である(問題点を絞るために、ほかの盗用箇所は今扱わない)。

ただし、この盗用問題は、長い間研究者には認識されなかった。問題があることさえ知られていなかった。それが表面化したのは、作品の刊行から約60年後、1960年代のことだ。

時間を追って経過を説明する。

「老残遊記」は第13回までが『繡像小説』第9-18期(1903年八月初一日-刊年不記[1903年十二月十五日だと考えられていた])に連載され、中断している。

「老残遊記」第11回には「北拳南革」など出てこない。連載中断の理由も、その時は明らかにはされていない。当時の連載小説で中断したものはいくらでもある。「老残遊記」が特別な例でもなかった。

「文明小史」第59回は『繡像小説』第55期(刊年不記[1905年七月初一日だと考えられていた])に掲載された。

こちらの第59回には「北拳南革」が出てくる。

ここで読者は奇妙に感じるはずだ。初出の「老残遊記」第11回に出てこない「北拳南革」が、あとから掲載された「文明小史」に出現する。ならば、盗用問題など発生する余地はない。確かに、「老残遊記」が雑誌で連載を中断したままであったならば、何も問題にはならなかったかもしれない。だが、「老残遊記」は、後に別の場所で追加執筆され初集20回が『天津日日新聞』に連載されたあと単行本になって出た。重版をくり返し広く読まれた。魯迅が清末の4大小説のなかに挙げたことも普及する要因となったであろう。

ある人が、「老残遊記」を初出雑誌と単行本で読み比べた。その感覚鋭い読者は、疑問をもつ。単行本にある第11回は、雑誌初出には存在していない。ならば、「老残遊記」といっても2種類あるのか。そう、「北拳南革」部分の存在しない雑誌初出と「北拳南革」部分が書き込まれた後の版本の2種類がある。

「劉鉄雲日記」の乙巳(1905)十月初三日には、旅先瀋陽の旅館で「老残遊

記」第11回(巻11)を書いたとある。翌日には第15回を執筆する(注:この第11回は、以前は「老残遊記」二集のものだとされていた。事實は初集だから、今ここに配置する)。

「文明小史」第59回は、『繡像小説』第55期に掲載された。その第55期の刊行は、1905年七月初一日だと考えられていた(注:上述のように発行は遅延していたのが事実だ。しかし、研究の経過をたどるためにこのままにする)。時間の推移を表面からだけたどれば、ここでも「老残遊記」第11回執筆の方が「文明小史」第59回よりも遅い。問題の「北拳南革」部分も、表面だけ見れば、この時、劉鉄雲は自分の原稿に取り込んだことになる。

以上の時間的経過を見る限り、「北拳南革」についていうと次のようになる。

「文明小史」が先で「老残遊記」は後に発表された。ならば、劉鉄雲が「文明小史」から「北拳南革」部分を自分の「老残遊記」に盗用した。

気づいた人もいるはずだ。「劉鉄雲日記」に見える「老残遊記」第11回の翌日は第15回を執筆している。なぜ第12-14回をとばしたのか。また、劉鉄雲が「文明小史」から「北拳南革」をもし盗用したのならば、第11回にわざわざ滑り込ませる理由はなんだろう。いくつかの話題によって成立している「老残遊記」だから、のちに加筆した部分に盛り込めばいいだけのことだ。なぜ第11回にさかのぼらせるのか。

しかし、細かい箇所だ。注意を引かなかった。というよりも、の日記部分が

公表されたのは1960年代だ。くわえて、そこに書かれた第11回原稿は二集だと誤解されていた。問題になどなりはしない。

振り返れば、大きな転換点のひとつは、劉大紳「關於老殘遊記」(『文苑』第1輯1939.4.15)の公表だった。うわべの現象を追うだけでは、「老殘遊記」と「文明小史」の盗用関係は理解できないことが判明する。

劉鉄雲の息子大紳が、「老殘遊記」の雑誌連載が中断した理由を文章にして暴露した。その事情は、当事者でなければ知ることのできない種類のものだ。

劉鉄雲が連載を中断した理由とは、「老殘遊記」第11回原稿が『繡像小説』の編者によって没書にされたからだ。言うまでもないと思うが、第11回原稿には「北拳南革」が盛り込まれている。

原稿を没書にできる権限を持つのは『繡像小説』の主編である。主編といえば、李伯元だ。李伯元が劉鉄雲の原稿をボツにした。

この没書の事実 と上の に示した「劉鉄雲日記」の原稿第11回執筆が結びつく。『天津日日新聞』に連載をするために没書部分を復元する必要が生じた。元の原稿は『繡像小説』の編集者に届けていた。劉鉄雲は、手元に残していた下書き草稿にもとづいて第11回原稿を復元したのである。この「復元」が重要だ。

没書になったとは、それまで関係者以外は誰も知らなかった。原稿が握りつぶされたことが、盗用問題に対する見方を今までとは違う方向に導く。

「老殘遊記」第11回未発表原稿の没書

という事実がある。連載中断の原因として理解できる。また、第11回下書き草稿の一部が存在していることも根拠になる。 の原稿復元とも一致する。『繡像小説』主編の李伯元によって没書が行なわれたことを否定することはできない。

最初の「老殘遊記」原稿(未発表第11回を含む)が先行して存在している。これが新しく判明した事だ。「文明小史」第59回が書かれるのは、「老殘遊記」原稿よりも後である。「文明小史」が「老殘遊記」未発表原稿から盗用した。それができるのは『繡像小説』の主編である。

加えて、上述のとおり『繡像小説』の発行が遅延していた事実が明らかになった。もうひとつの転換点だ。

『繡像小説』の停刊についてくりかえすと、以前の定説は、こうだ。光緒三十二(1906)年三月、李伯元の死去と同時に『繡像小説』は停刊した。しかし、それが否定され、同年年末にまで刊行がのびていた。必然的に、主編である李伯元の死去がからんでくる。『繡像小説』の創刊から停刊まで主編は李伯元だということができなくなった。

『繡像小説』の発行遅延を視野に入れて考えなければならない。劉鉄雲の「老殘遊記」原稿はその最後部分が遅くとも1904年四月までには李伯元のいる編集部に届けられている。

「文明小史」第59回が掲載された『繡像小説』第55期の刊行は、定説であった1905年七月初一日ではない。それよりも約一年も遅い1906年六月頃である。

と をあわせる。「老殘遊記」第11

回未発表原稿は、「文明小史」第59回よりもはるかに早く書かれていた。しかも、「文明小史」第59回を掲載した『繡像小説』第55期の刊行は、李伯元の死去1906年三月より後のことだ。先行する「老残遊記」原稿から「文明小史」が盗用したのは明らかである。その逆はありえない。

李伯元逝去の後に書かれた「文明小史」第59回は、それ以前からの南亭亭長名義を維持してはいる。だが、ここに見える南亭亭長の中身は李伯元ではない。考えられるのは、歐陽鉅源である。これで、没書と盗用の謎を解くことができる。以前は、李伯元がボツにしたものをふたたび盗用した理由を説明することができなかった。没書にしたのは南亭亭長(李伯元)であり、盗用したのが南亭亭長(歐陽鉅源)である。署名は同じだが別の人物だ。ゆえに、没書と盗用は成立する。

清末時期、『繡像小説』編集部が集まってくる原稿をどのように管理していたのかはわからない。使用済みの原稿を著者に返却したとも聞かない。そのまま机の中にでも収めたか。あるいは随時に破棄したか。自然に散逸したのもあっただろう。また、『繡像小説』編集部といっても、商務印書館内部に別の部屋が割り当てられていたのかも不明だ。

しかし、少なくとも劉鉄雲の没原稿は、編集部には保管されていた。もしかりに、南亭亭長が『繡像小説』の編集部とは無関係の単なる寄稿作家だとしたら、没原稿から盗用できるだろうか。商務印書館に勤める別の編集者が、没原稿を外部の

作家でしかない南亭亭長にわざわざ見せたとしてもいいのか。

劉鉄雲と南亭亭長の双方からこの盗用問題を見てみよう。

劉鉄雲が盗用する可能性はあるか。

劉鉄雲が未発表原稿第11回を復元したのが1905年十月だ。南亭亭長「文明小史」第59回の『繡像小説』掲載は上述のように1906年六月頃になる。劉鉄雲からすれば、後から公表される文章から盗用することは不可能だ。自分の原稿だったからこそ第11回原稿を復元する必要があった。

南亭亭長が盗用する可能性はあるか。

どう考えても、「文明小史」の方が「老残遊記」原稿よりも後に書かれた。「文明小史」第59回を見ればわかる。南亭亭長が盗用したに違いない。

そこで新しい問題として浮かび上がるのが、『繡像小説』のふたり目(あるいは臨時というべきか)の主編と南亭亭長の正体である。

くり返しになる。李伯元の死後も『繡像小説』は刊行されつづけた。発行元は商務印書館である。主編が死去すれば、あるいは死去しなくても別人に変更することは自由だ。雑誌が継続発行されているからには、李伯元にかわる主編がいたはずだ。別の人を探すまでもない。李伯元の協力者だった欧陽鉅源がそこにいる。当面は彼が引き継いだとしか考えられない。欧陽鉅源は、主編李伯元によって没書にされた「老残遊記」第11回原稿が『繡像小説』編集部にあることを知っている。欧陽は、南亭亭長名の「文明小史」を継続連載するために原稿を書く必

要があった。手元にある「老殘遊記」の原稿を見てそれを「文明小史」に取り入れた。可能性というよりも、実際に他人の未発表原稿から盗用した。

別の可能性を考える。「老殘遊記」は『天津日日新聞』に連載後、単行本となった。欧陽鉅源は、その『天津日日新聞』、あるいは単行本を見てそうしたのか。

これについて、私は否定的だ。上海にいる欧陽が天津で発行される『天津日日新聞』を読んでいたとは考えにくい。だいいち『天津日日新聞』に「老殘遊記」が連載されていたことなど彼は知らなかっただろう。手元にある劉鉄雲の原稿から自在に使用(盗用)できたのは、欧陽鉅源が『繡像小説』の主編であったからこそだ。

結論である。「老殘遊記」第11回原稿を没書にした『繡像小説』主編は、李伯元である。李伯元の死後に該誌の臨時主編になったのは欧陽鉅源だ。李伯元が没にした原稿を欧陽鉅源が盗用した。「文明小史」の著者南亭亭長という筆名は、李と欧陽の共同筆名である。

『繡像小説』は、李伯元を失った時、欧陽鉅源がかろうじてあとを継承し、第72期までを刊行した。商務印書館は、新聞広告で誌面刷新を予告してもいる。それを見れば、なんとか刊行を続行しようと考えていたことがわかる。しかし、その計画は実行されなかった。第72期を刊行したままそれで打ち切り終刊となった。

四

## 《老殘遊記》婦女形象及太谷學派 婦女觀淺析

朱 松 齡

摘要：劉鶚在《老殘遊記》中塑造了四類婦女形象，有貴婦烈女、有村姑民女、有尼姑娼妓，還有惡婦劣女，通過她們紛雜的形象，作者宣揚了太谷學派的婦女觀：即詮釋了重視婦女地位與作用的觀點；闡述了性欲的自然性與合理性；表達了對娼妓這一社會底層婦女群體的不同世俗的看法。這些思想觀點，在當時無疑是有一定進步性的。

關鍵詞：老殘遊記；婦女形象；太谷學派；婦女觀

《老殘遊記》被魯迅先生譽為清末四大譴責小説之一。作者劉鶚以現實主義手法描述了清朝官場的腐敗，揭露了清官酷吏的殘暴與昏庸，同時也反映了清末社會的悲慘現實，表達了作者憂國憂民之悲情。馬克思主義認為，在人類社會中，“婦女在創造人類文明、推動社會發展中具有偉大的作用。婦女與男子同是人類歷史前進的推動者，同是社會物質文明和精神文明的創造者”。馬克思主義同時也指出：“婦女被壓迫是人類歷史發展的一定階段上的社會現象”。在《老殘遊記》中，作者在揭露社會黑暗同時也揭示了清末婦女生活，塑造了許多婦女形象，上至官宦命

婦，下到娼妓優伶，多達三十余個，其中前二十回中的璵姑，後九回中的環翠、逸雲都給人留下了深刻印象。這些婦女形象的塑造，不僅是為了故事情節的需要，更是作者婦女觀的體現，表達了作者對封建社會婦女的同情和尊重，甚至書中有的女性成了作者思想觀點的代言人。

《老殘遊記》中的婦女大體上可分為四類：

一是“貴婦烈女類”：其中較具代表性的有京官德慧生的太太德夫人；有為冤死的丈夫於學禮殉情而死的烈女吳氏；有和逸雲相好的任三爺的娘任老太太等。對德夫人，作者無疑是十分贊賞的，把她寫成一個對丈夫順從，寬厚、善解人意的好妻子，對下人是個仁慈，善良，體恤的好主婦。如她看到逸雲後就心生收作偏房之想法，而且表示“作姐妹相處，不分長嫡”。對吳氏的貞烈，作者不僅有文字上的褒贊，而且在情節上作了“以死殉情”的安排。作者在《老殘遊記自評·第五回》中說：“玉賢殘酷，吳氏節烈，都寫得奕奕如生，有功於人心世道不少”。並曰：“陳仁美成吳少奶奶節烈，猶有人心，賢於玉賢遠矣”。小說對任老太太的描寫不多，但她對兒子的一番苦口婆心的論理，卻將一個富紳主婦描述得淋漓盡致，任老太太維系家庭的苦心，對人際關係的把握和對幼子有度的寵愛都躍然於紙上，其精明老到不能不讓人折服。此外還有高紹般的小妾，魏謙的小女，老殘的姐姐，雖著墨不多，但其不同身份和境地也表達得恰到好處。

二是“村姑民女類”。這類出身於平民百姓家的婦女有深居山野遠避凡塵的璵

姑、阿扈、阿勝；有以賣唱為生的白妞、黑妞姐妹；有小生意人王妻，王三媳婦，有德家的女傭王媽，以及女鬼石家妹妹等。個中對璵姑的刻劃是重中之重。她不僅是個通曉古今的儒家才女，精於古典樂器的演奏家，更是作者的代言人，通過她的議論表達了劉鶚推崇儒學的觀點，闡明了作者對三教關係的獨特看法。此外，“聽書”一章中對白妞、黑妞的描述細致生動，刻劃了民間藝人的完美的藝術形象，成為膾炙人口的留世佳篇。

三是“尼姑娼妓類”。這是生活在封建社會底層受壓迫最深的婦女群體。全書有名姓的妓女竟有9個之多。有公開的窰姐翠花和翠環（後改名環翠）；有半尼半妓的靚雲，逸雲、彩雲、逸雲的師叔等；有土娼小金子和小銀子；還有《外篇》殘稿中的小蓉……對這些娼妓的描寫中，我們看到的多是同情和憐憫，並沒有世俗的憎惡和鄙視。小說中也安排了為翠花、翠環贖身，讓娼妓從良的情節，以及德慧生仗義投書州府，拯救尼妓靚雲的故事。如果說在前20回中，璵姑是作者的代言人，那麼在後九回中則半妓半尼的逸雲也充當了作者代言人的角色。作者用了大量篇幅，濃彩重墨描繪了逸雲。通過逸雲和任三爺的愛情故事；通過她和赤龍子的友情描述；通過她對德夫人講述對男人追求的心理歷程；通過靚雲問老殘佛偈的細節描寫……寫出了逸雲大徹大悟的全過程，塑造了一個博學多才悟透人生的婦女形象。在作者心目中經歷了世間許多磨難的逸雲，較之遠僻塵囂的璵姑，其境界更高了一個層次，這個作者心中的理想人物，不僅值得崇敬，更應視為神聖而膜拜。在德

慧生得知夫人想收逸雲為偏房未成時，他不但不惋惜，竟說“我只想有這麼個朋友”。老殘也應和道：“誰說不是呢？”

四是“惡婦劣女類”。小說中的惡婦劣女不多，但多限於有錢人家。如兇狠惡毒的顧四爺的大老婆即其一。逸雲師叔嫁給顧四爺作妾，就是因受不起大老婆的虐待飲生鴉片自殺的。再如吳二浪子的情人賈大妮子了，也是富家女，為了私情能得逞，為了一點口角不和瑣事，竟害得于家幾口死於站籠，另13人幾乎喪於非命。

作者對前三類婦女多是褒揚贊頌的正面人物；後一類則是揭露和斥責的反面角色。這裏不僅表現了作者愛憎分明的立場，還突顯了作者對社會底層婦女的關切態度。尤其是對妓女的刻畫描寫真摯動人。作者在《老殘遊記自評》第十三回中寫道：“野史者，補正史之缺也。名可托諸子虛，事須征諸實在。此兩回所寫此妓，一斑毫厘無爽，推而至之別項，亦可知之”。可見作者是在現實生活中對青樓女子有真切了解，深切感受才這樣寫的。筆者還注意到，在《老殘遊記》全篇，包括《續集》九回，《外篇》半回中，妓女幾近成為貫串故事的線索：暗娼小銀子的出現成為偵破命案的重大線索和轉機；環翠從前集十三回出場，一直延續到續集的第六回，由環翠的命運可見黃河民眾苦難之一斑；逸雲是《續集》前六回的主角，占據了最大的篇幅；幸存的《外篇》手稿只有十幾頁，就引出了妓女小蓉，可以看出小蓉是個不可或缺的跑龍套人物。《外篇》續寫者正是以她作為故事線索展開全書的。為此我們不禁要問：“劉鶚為什麼對“妓女”情有獨鍾？”筆者認為要追究

劉鶚這樣寫作婦女的原由，不得不了解他所信奉的太谷學派的婦女觀。

中國封建社會婦女受著四重枷鎖，是封建統治階級集歷代腐朽反動的婦女觀之大成的時代。皇權、神權、族權、夫權四條繩索緊緊地套在中國女性的脖子上，婦女的命運已經降到了前所未有的低下。在這個制度下，產生了一套旨在使每個人的言行符合等級人倫關係規定的要求和規範，並形成了以“三綱五常”、“三從四德”、“男尊女卑”為基本特征和基本內容的封建禮教。從根本上講，它是為維護大一統的封建統治、穩定封建秩序，對廣大婦女實行束縛、奴役和壓迫服務的。對這種糟粕性的文化傳統，封建倫理道德觀念隨著封建歷史的發展而發展。進入封建社會以後，儒家思想與倫理道德觀念緊密結合，“三綱五常”、“三從四德”之類的說教成為桎梏婦女的精神枷鎖，婦女完全喪失了獨立的人格和一切正當的權利。

太谷學派既然傳承於儒學，自然也接受了其婦女觀。在《老殘遊記》中，自然也表現了對“男尊女卑”，“一夫多妻”制度的擁護；對婦女“從一而終”、“夫唱婦隨”等觀點的認同。然而，太谷學派對婦女的態度與一般的儒家和借儒家思想禁錮婦女的統治者還是有所不同的。

首先表現在對婦女地位作用的重視上。《龍川夫子年譜》記載：“師夢見天榜書一‘好’字，覺而語於眾曰：‘一陰一陽之為道，女教興矣’”。這裏的女教，筆者認為從狹義講是指女門人弟子的崛起；從廣義講暗示著婦女在整個社會中的地位與作用將受到重視。在太谷學派第二代傳人中，除張石琴的夫人外，還有兩位著名

女弟子，一是李素心，一是張蓉裳，為張石琴的左右手。《山東軍興紀略》載：張積中在黃崖山“深夜參拜，升降禮節繁縟，素心、蓉裳盛裝挾劍而侍”。李光昕在庚子花朝會作詩七章，詩首文曰：“庚子花朝石琴與諸仙為蝴蝶之會，惟予與素心不與焉，會中諸人各賦詩以紀盛，予因感而賦，此得絕句七章”。可見素心在學派中的地位。有研究者認為《老殘遊記》中璵姑的原型就是李素心，此說不無道理。此後太谷學派打開了接受女弟子的大門，有據可查的就達十余人，並賜學名，有復字輩，本字輩，學名均不用夫姓，表現了學派男女平等的觀念。劉鶚繼室鄭安香即復字輩（見《劉蕙孫論學文集》210頁）。女弟子雖然多系男門人的家眷親屬，但也不乏有信仰者投拜門下。《龍川夫子年譜》中其弟子謝逢源記載：“師在滬以西法照相二。一燕居葵扇葛巾，神氣凝穆，待者陳建安、顏甫實、趙伯言、劉雲搏及逢源六人。一形色清癯，破顏微笑，拈花待者王月卿也。月卿常熟人，善事師，願終母養，隨師進修。師贈聯云：‘好向月中尋自在，但憑卿意欲何如’。師已為之受記矣”（此照片已發表於“雜家劉鶚”網站）。太谷學派到了第四傳，黃葆年西去後，蘇州歸群草堂掌門無人，公推黃的夫人擔綱多年。以後，據說有一位蔡姓女弟子，晚輩稱為陸五姑者為繼承人，直至解放後尚有講學活動。這也印證了李龍川“女教興”的寓言。

在《老殘遊記》中，“太谷學派”真正的代表是隱居“在華山裏頭人跡不到的地方”的周耳先生，以及得了周耳真傳的青龍子、黃龍子、赤龍子兄弟數人。正因為太谷學派各代傳人對女性的重視，劉

鶚才會在《老殘遊記》中，寫出與黃龍子甚熟的璵姑和與赤龍子交往甚密的逸雲二位近似神化的女性，並通過她們宣傳了學派的儒學觀點。

請看璵姑是怎麼評說三教贊頌儒學的：在申子平請教黃龍子的詩時，她說：“儒、釋、道三教，譬如三個鋪面掛了三個招牌，其實都是賣的雜貨，柴米油鹽都是有的，不過儒家的鋪子大些，佛、道的鋪子小些，皆是無所不包的，”又說：“凡道總分兩層：一個叫道面子，一個叫道裏子。道裏子都是同的，道面子就各有分別了”。申子平繼續請教三教的異同、大小時，璵姑說：“其同處在誘人為善，引人處於大公。人人好公，則天下太平；人人營私，則天下大亂。惟儒教公到極處。你看，孔子一生遇了多少異端，如長沮、桀溺、荷蓀丈人等類，均不十分佩服孔子，而孔子反贊揚他們不置：是其公處，是其大處。所以說：‘攻乎異端，斯害也已’。若佛、道兩教，就有了徧心：惟恐後世人不崇奉他的教，所以說出許多天堂地獄的話來嚇唬人。這還是勸人行善，不失為公。甚則說崇奉他的教，就一切罪孽消滅；不崇奉他的教，就是魔鬼入宮，死了必下地獄等辭：這就是私了。所以就愈小了。……只是儒教可惜失傳已久，漢儒拘守章句，反遺大旨；到了唐朝，直沒人提及。韓昌黎是個通文不通道的腳色，……他卻又要辟佛、老，倒又與和尚做朋友。所以後世學儒的人，覺得孔、孟的道理太費事，不如弄兩句辟佛、老的口頭禪，就算是聖人之徒，豈不省事。弄的朱夫子也出不了這個範圍，只好據韓昌黎的《原道》去改孔子的《論語》，

把那‘攻乎異端’的‘攻’字，百般扭捏，究竟總說不圓，卻把孔、孟的儒教被宋儒弄的小而又小，以至於絕了！”

此後，璵姑在為申子平解釋“好就是壞，壞就是好”時說：“由此可知，月球無論其為明為暗，其於月球本體，毫無增減，亦無生滅。其理本來易明，都被宋以後的三教子孫挾了一肚子欺人自欺的心去做經註，把那三教聖人的精義都註歪了……不生不死，不死不生；即生即死，即死即生，那裏會錯過一絲毫呢？”

接著，璵姑又用《周易》的“無極太極說”解釋了：“‘勢力尊者’就是儒家說的個‘無極’，上帝同阿修羅王合起來就是個‘太極’”。並強調“所以各宗教家的書總不及儒家的《易經》為最精妙”。其實這些都是太谷學派的觀點。

再看逸雲是怎樣議論人生的：

逸雲回答德夫人道：“愛心怎能沒有？只是不分男女，卻分輕重。譬如見了一個才子，美人，英雄，高士，卻是從欽敬上生出來的愛心；見了尋常人卻與我親近的，便是從交感上生出來的愛心；見了些下等愚蠢的人，又從悲憫上生出愛心來。總之，無不愛之人，只是不管他是男是女”。這正是太谷學派“一蟻之饑如已饑之，一蝶之寒如已寒之”觀點的體現。

逸雲在回答德夫人自己對情愛覺悟的心得時說：“只是一個變字。《易經》說：‘窮則變，變則通’。天下沒有個不變會通的人”。所以“推到這裏，世間就沒有我中意的人了。既沒有我中意的，反過來又變做沒有我不中意的人，這就是屢變的情形。近來我的主意把我自己分做兩個人：一個叫做住世的逸雲，既做了斗姥

宮的姑子，凡我應做的事都做。不管什麼人，要我說話就說話，要我陪酒就陪酒，要摟就摟，要抱就抱，都無不可，只是陪他睡覺做不到；又一個我呢，叫做出世的逸雲，終日裏但凡閑暇的時候，就去同那儒釋道三教的聖人頑耍，或者看看天地日月變的把戲，很夠開心的了”。

逸雲還引《金剛經》大談人相我相，她說：“《金剛經》云：‘無人相，無我相’。世間萬事皆壞在有人相我相。《維摩詰經》：維摩詰說法的時候，有天女散花，文殊菩薩以下諸大菩薩，花不著身，只有須菩提花著其身，是何故呢？因為眾人皆不見天女是女人，所以花不著身；須菩提不能免人相我相，即不能免男相女相，所以見天女是女人，花立刻便著其身。推到極處……我輩種種煩惱，無窮痛苦，都從自己知道自己是女人這一念上生出來的；若看明白了男女本無分別，這就入了西方淨土極樂世界了”。她又借赤龍子的話表明：‘我精神上有戒律，形骸上無戒律，都是因人而施。譬如你清我也清，你濁我也濁，或者妨害人或者妨害自己，都做不得：這是精神上戒律。若兩無妨礙，就沒什麼做不得，所謂形骸上無戒律。……’”在太谷學派中各代傳人也常引用佛經道義來闡述儒理，逸雲的論證方法與學派門人如出一轍。

逸雲還借德慧生的名字闡發“自古‘儒釋道三教’均要立德為本的義意，她說：“名者，命也，是有天命的”。“‘德’字為萬教的根基，無德便是地獄。種子有德，再從德裏生出慧來，沒有一個不成功的了。他怎麼不叫德富、德貴呢？可見是有天命的了”。這裏的“名者，命也，”

正是引用了李光昕原話：“姓者性也，名者命也”（見《觀海山房追隨錄》第30頁）。“天命說”也是太谷學派的基本理論之一。

第二，太谷學派對“性欲”有著獨特的見解。說到性和欲，必然會聯想到男人和女人，想到男女關係。傳統的儒家有“淫為萬惡之首”的觀點，主張“存天理，滅人欲”，視“女子與小人難養”。李光昕在其著作《觀海山房追隨錄》中鮮明地提出了不同觀點。他說：“天理不違乎人情，人情乖即天理蔑也。凡夫溺情欲紊三綱，二氏斷情欲絕三綱，聖人不斷情欲而不為情欲所牽，不絕三綱而不為情欲所累，以其所以異於凡夫二氏也”。《脞語·李龍川先生》有記載曰：“一日，使弟子言志，戒勿矯飾。有某言：‘弟子不好色’。先生呵之曰：‘非人情，曾狗彘之不若耶！’”另據《龍川夫子年譜》記載：“一日，陳伯嚴孝廉謁師於旅館，師問所好。曰：‘好文，好友，好色’。師曰：‘文友女一也’。與講論經義十數日”。李光昕認為“於天理中看出人欲流行，仁之至也。於人欲看出天理流行，知之極也。故曾子曰：‘好而知其惡，惡而知其美，天下鮮者’”。他把“好色好貨好勇”皆看作人之常情，關鍵是不能沉湎其中，一沉湎便難以救藥。

在《老殘遊記》第九回中，作者借璵姑之口，把肯定人欲的自然性、合理性闡述得更為明白。璵姑曰：“聖人說，所謂誠其意者，毋自欺也。如惡惡臭，如好好色。孔子說：‘好德如好色’。孟子說：‘食色性也’。子夏說：‘賢賢易色’。這好色乃人之本性。宋儒要說：‘好德不好色’非自欺而何？自欺欺人，不誠極

矣！他偏偏要說‘存誠’，豈不可恨？”璵姑還進一步論證：“聖人言情言理，不言理欲。刪《詩》以《關雎》為首。試問‘窈窕淑女，君子好逑’，‘求之不得’至于‘輾轉反側’，難道可以說這是天理，不是人欲嗎？”

在《二集》第八回中，作者借閻羅王之口解析“淫”律：閻王說：“淫本無甚罪。罪在壞人名節。若以男女交媾之謂淫，倘人夫妻之間日日交媾，也能算得有罪嗎？……若有節制，便一毫罪都沒有”。

說到婦女失節。《老殘遊記》作者也持極寬容態度。作者通過逸雲之口說：“女子失節是大過犯，比起吃葷重萬倍。試問你姨太太失了多少身？這罪還數得清嗎？其實，若認真從此修行，同那不破身的處子毫無分別。因為失節不是自己要失的，為勢所迫，出於不得已，所以無罪”。

正是因為太谷學派對人欲和性的肯定，劉鶚才能在《老殘遊記》中對尼妓逸雲的“少女情懷”作大膽、細膩的描寫。書中逸雲對德夫人坦蕩表述：“男女相愛本是人情之正，被情絲系縛也是有的”。“您想一個女孩子家長到十六、七歲的時候，什麼都知道了，又在我們這個廟裏……”言下之意是“怎麼會不動愛心”？之後，逸雲泣訴了她與任三爺的淒美戀情，闡述了自己從十二、三歲到十八、九歲，從喜歡美男子變到愛大英雄大才子。這些惟妙惟肖的描寫不正是青春期的性心理的真實寫照嗎？

第三，對娼妓的寬容和理解。娼妓是人類社會最古老的職業之一，是階級社會無法根治的弊病。封建社會的娼妓更是生活在社會最底層的婦女群體，為人們不恥，

更為社會不容。在封建社會女人失節尚不如死，更何況以出賣肉體為營生的娼妓呢。然而太谷學派對娼妓卻有著別樣的見解：李光昕曾求問周太谷：“‘世之學道者眾也，然有成有不成何也？’太谷曰：‘嫖也成，賭也成，當家三年永不成’”。李光昕認為“山人妓女雖非僧道，亦皆出家人也。與之遊燕可以怡性情”。他還說：“土德運會最廣，貴若王侯，賤若娼優，遠若狄夷，皆可入道”。由此可見，學派對嫖娼者和賣淫女持一種極為寬容的態度，認為這不妨礙成道，甚至與其交往可以陶冶性情。《龍川夫子年譜》中有不少對學派門人“徵歌酒市，擁妓飛車”的記載：如“一日，(李光昕)率諸弟子選名妓，駕馬車，遊於中園。(李光昕說)吾今作東道，爾等各招相識，竟日夕歡。於是偕赴戲館，正坐惟師弟五人及群妓二十余人而已”。李光昕更有“擬物色一妓，以供行役”之事。“從者各薦所識”，“間有當意者，每令人百計籌畫，垂成而忽輟”。據資料記載《老殘遊記》作者劉鶚也是“擁妓飛車”中人也，上文所引上海照相中的劉雲搏即劉鶚。

由此可知，劉鶚在《老殘遊記》中對妓女的同情憐憫，乃至美化神化是有其深刻思想根源的。逸雲就是妓女中入道者的典型，她年方二十光景，卻滿腹經綸，閨房的“書架上堆著無限的書”，隨手抽一本就是《大般若經》。逸雲一開口即引經據典：引《易經》說“變”，引《金剛經》解“人我相”。其師弟靚雲尚把《金剛經》、《法華經》、《楞嚴經》說成“無非眼面前的幾部經罷了”，可見師兄逸雲對佛經的熟諳程度了。逸雲妙解“佛偈”一

節，更令人刮目相看，連老殘也嘆為觀止道：“真正生花妙舌！”逸雲不但能文，亦能習武。用德夫人的話說就是“又風雅，又潑辣”，“文武雙全”，“又能幹，又謙和”的女人。作者在寫逸雲跟轎登泰山頂的情景時，十幾裏崎嶇山路她竟如履平地，談笑風生，用逸雲自己的話說“一天盡量我能走二百多里地呢！”；在寫山頂住店時，她僅一薄毯，一竹枕即可過夜，尚說“且不要它也不要緊”。即使這樣，作者還不滿足，又賦於逸雲預測未來，先覺前知的功能，在德夫人眼中逸雲“真是活菩薩”。她能看出環翠“也是個有根器的人”，“決計是仙人墮落，將來要證果的”；她能預知德慧生“不出三年必棄官學道”，夫婦二人都能修成正果……凡此種種神化之筆，無不表現出作者理想中的婦女形象，傳達了作者對婦女的好感甚至崇敬。

綜上所述，劉鶚在《老殘遊記》中通過各種婦女形象的塑造，宣揚了太谷學派的婦女觀：重視了婦女的地位與作用；闡述了性欲的自然性與合理性；表達了對娼妓這一社會底層婦女群體的不同世俗的看法。這些思想觀點，在當時無疑是有一定進步性的。但也不可否認，由於歷史和階級的局限性，太谷學派的婦女觀仍隸屬於封建儒學體系，個中還有一些宣揚迷信輪回宿命論等糟粕，應加以批判。 ㊦

參考書籍：

《老殘遊記》初集、二集、外編

《太谷學派遺書》有關輯、卷 江蘇廣陵古籍刻印社出版

《劉鶚及老殘遊記資料》四川人民出版

《法蘭西之魂》の原作

渡辺浩司

1

《小説海》第二卷第九号(中國圖書公司  
和記,1916年9月1日)に《法蘭西之魂》なる  
短篇小説が掲載された。前書に、原作者  
Maacelle Tinayre(丁納而夫人)、原作名  
“ The Soul of France Was In Her ” が記さ  
れている。この作品の正確な原作者名、  
原作名及び中国語訳が拠った原作掲載誌  
が判明したので、本稿で報告する。

正しい原作者名は、Marcelle Tinayre  
である。Tinayre は、1870年生\*1、1948  
年没のフランスの作家。数十作の著作が  
ある。

作品については、辞典類を見ても、フ  
ランス語のものばかりであった。にもか  
かわらず、中国語訳が英文タイトルを掲  
げているのは不思議な感じがしていた。

社出版

其他有關論述如《劉蕙孫論學文集》等

2009年10月修改於杭州嘉綠苑

偶然 『The Strand Magazine』 Vol.51-  
No.306(1916年6月)を見た所、英訳 『“ The  
Soul of France Was in Her ”』 が掲載され  
ており、タイトル下には「From the  
French of Marcelle Tinayre」と正しいつ  
づりで原作者名があった(英訳者名無)。  
更に、前書で原作者紹介があり、これが  
中国語訳の前書とほぼ一致していた。そ  
れ故、中国語訳《法蘭西之魂》が基づい  
たのは、フランス語原作ではなく、この  
英訳 『“ The Soul of France Was in Her ”』  
だと判断した。

中国語訳者“陳翠娜”は、陳小翠で、  
原籍は浙江杭州、1907年生、1968年没、  
画家として活躍した。父は陳栩、兄は陳  
定山。

2

『“ The Soul of France Was in Her ”』の  
あらすじを述べる。

暑い日の午後、Marie Morin は臨時の  
郵便局長として働いていた。彼女はまじ  
めで賢い若者だった。局長のMlle.Cantel  
は二日前から寝込んでいた。更に、突然  
出て行った使用人の分も Marie は働いて  
いた。

1914年9月初め、Aisne 川と Oise 川  
の間の地方もパニックの空気に覆われて  
いた。Saint-Pierre 村には鉄道も高速道  
路も無く、兵士の姿はほとんど見かけな  
かったが、四マイル離れた同地方の中心  
都市、Chevilly には鉄道が通り、Saint-  
Pierre よりは恵まれていた。そこで、  
Cantel は Chevilly の郵便局長、Mme.Aubert  
によく電話し、状況を聞いていた。その

ニュースは不正確で、村民は大変不安がっていた。村民は、ベルギー侵攻やそこでの残虐行為の記事を読んでいたので、ドイツ兵による自分達への残虐行為を想像したのである。

すでに村を去る人もいたが、Cantel はそうしなかった。主任司祭の訪問時も、「私は公僕で、戦時でも留まる」と話した。司祭が Marie はどうするのかと尋ねると、Cantel は親類の所に行かせると答えたが、そこにいた Marie は自分も公務員だから離れないと言った。Marie は孤児で、Cantel に引き取られ育てられていた。実際、Marie は無給の助手で、郵便関係の資格試験の準備をしており、郵便局長になるのを夢見ていた。

遠雷のうなりに似た音が響いてきた。隣で横になっていた Cantel が尋ねたので、Marie は雷だと答えた。だが音がまた聞こえ、Cantel は戦争が我々の所にもやって来たと言った。二人が話している所に、Chevilly から局員の Père Bastié が着いた。彼は郵便物は無いと言い、更に、線路が断たれ、鉄道は不通だ；Chevilly は負傷者でいっぱいだ；一連隊が命令待ちで駐留中だ等と話し、事情は大変悪いと語った。情報を求めて人が集まってきたので、Marie は彼に、村長の所に行き、規則通りまた5時に来るよう言った。

夕方から夜にかけて砲声が響いていた。地平線は真っ赤で、煙も多く、大火災の発生を示していた。村民は通りに出ていたが、Marie は Cantel に付き添っていた。部屋の窓からも火災の反射で庭が赤くな

っているのが見え、銃声が次第に近づくようだった。

夜明け頃、自転車に乗った男が村を通った。男は半狂乱のように「逃げろ、奴らが来る、すべてを焼いて、殺して、壊している」と叫び、Chevilly の方へ去っていった。その恐怖は村に伝染し、村民は荷物をまとめ、家畜を連れて、遊牧民のように村を離れていった。残ったのは十数名であった。

日中は静かに過ぎた。Marie は何度も Aubert に電話したが、ニュースは無かった。Marie は電話の重要性を理解しており、村の近くで異常があれば、Aubert へ連絡し、すぐに軍に伝わるだろうと考えていた。そして、このためだけにでも、自分が村に留まるのは正しいと思った。

Cantel に薬を飲ませた後、Marie も横になったが眠れなかった。ドイツ軍に侵略されるフランスのことを考え、静かに闘志を燃やしていた。彼女は、旧約聖書の挿絵を思い出した；Holofernes を殺した Judith、Sisera を殺した Jael。また、歴史教科書の挿絵も思い出した；Joan of Arc や Jeanne Hachette。そして、自分も彼女達のようにできるだろうかと思ったが、フランスが征服されることや敵のドイツ兵のことを考えると、自分の中に荒々しい何かが沸き立ってきて、男のように入隊して戦えない不満を声に出した。

深夜、馬の通る音が聞こえ、誰かが食堂の雨戸を叩いた。Marie が応じると、外には四人のドイツ騎兵がおり、食事を要求した。Marie はドアを開け、四人は銃を持ち、家に入った。Cantel は驚いて



起き、大声を出した。一人が誰か隠れているのかと言い、凄んだが、彼女は落ち着いて、男を Cantel の部屋へ案内した。途中、男は、三日でパリを陥落させる等と言った。Cantel と Marie はお互い寄り添って、こんな時、こんな所に現れた敵兵を不思議そうに見つめ、現実ではないように感じていた。

その後、男から村の人口や多くの家が空っぽの理由等を尋ねられ、Cantel は答えた。更に、村に残っている理由を聞かれると、決してここを離れないと答え、Marie に食事を出すよう言った。

夜明け頃、ドイツ兵はワインをたくさん飲み、また疲れていたこともあって、一人を除いて眠ってしまった。その一人は、それまで Marie らと話していた男だった。男は Marie を詰問するのを楽しんでいるようだったが、彼女は非常に冷静だった。彼女が男のグラスに飲み物を注

いだ時、髪が男の頬に触れた。男は髪に手をやり、なれなれしく話しかけ、ニーチェを引いて「男は戦いのために造られ、女は戦士のために造られる」と言った。Marie は怒り、あの旧約聖書の勇敢な女性達を再び思い出した。その怒りの表情を見て、男は酔いが覚めて立ち上がった。男は彼女に迫っていき、彼女はテーブルの所まで下がり、手を後ろにやってナイフを探した。

その時、Chevilly からの電話のベルが鳴り、男は勝利の叫びと共に電話の方へ向かった。Marie はナイフを隠し持ち、ついていった。男は受話器を取って、満足しながら「Yes, yes!」と叫んでいたが、外国なまりを出さずにどう返答すべきかで顔が曇った。男は Marie に自分の言うことを繰り返すよう命じた。Marie が受話器を取ると、Aubert ではなく、男性の声で「ドイツ兵のパトロールを知らせた者は誰もいないというのは確かか」と聞いてきた。声の主は局に配置された司令官で、情報を求めていた。ドイツ兵は顔を近づけて、パトロールはいないと答えるようささやいた。すばやく Marie の腕が上がり、男ののどにナイフが刺さった。男は倒れ、死ぬ前に、Marie が電話に向かって助けを求めるのが聞こえた。

配達員が朝の集配にやって来た時、ナイフが刺さって死んでいるドイツ兵のそばで気絶している Marie を見つけた。Cantel は回復し、残りの三人がまだ寝ている部屋に鍵をかけていた。Chevilly からはフランス兵が救出に向かって急いでいた。

この作品も、前稿「《與子同仇》の原作」(『清末小説から』第98号,清末小説研究会,2010年7月1日)で採り上げた『For Belgium』と同じく、女性対ドイツ兵という設定で、舞台もほとんどが屋内である。更に、全六頁のうち、一頁が絵、半頁以上が絵・タイトル・原作者紹介なので、これまたかなり短い作品である。フランスへの愛国心を高めると共に、女性・病人にかかわらず否応なしに巻き込まれる戦争の恐ろしさを描いている。

### 3

中国語訳について述べる。加筆が異常に多いことが言える。また、それに伴い、叙述の順を変えている所もある。冒頭部分を挙げる。

The post-office was shaded by half-closed shutters, and in the sultry silence of this storm-threatened afternoon Marie Morin, the little clerk temporarily taking the place of Mlle.Cantel, the invalided postmistress, was feeling very tired. With elbows resting on the ink-stained wooden table, she was almost asleep.

On account of the extreme heat, she had opened her blouse at the throat and drawn up her fair hair in Chinese fashion, displaying thus her rather thin neck and mauve-veined temples. And though she looked just

a little girl, she was in reality a very wise and serious young person, upon whose frail shoulders rested a heavy burden of responsibility.(642頁左-右)

(郵便局は半分閉じたシャッターで日陰になっていた、この嵐になりそうな午後の蒸し暑い沈黙の中、Marie Morin は 病弱の郵便局長である Mlle.Cantel の臨時代理をしている若い局員 とても疲れていた。インクのしみがついた木の机に両肘をついて休んでおり、ほとんど眠っているようだった。

極端な暑さのために、彼女はブラウスのどのの所を開け、金髪を中国風にたくし上げており、とても細い首と藤色の筋が入ったこめかみを見せていた。彼女はまだまだ若い女の子のようだけれども、実はとても賢明でまじめな若者で、そのか弱い両肩には責任という重い負担がのしかかっていた。)

一日下午。天氣鬱熱。寒暑表升至九十五度以上。風息俱無。火繖雖斂。而墨雲四垂。如張漫天之幕。昏昏然令人煩悶。樹林盡作慘怖之色。作勢以待山雨之來。實則天公方與世人爲難。出其慘酷之手段。刀兵亢旱。正猶未艾。作此景象。不過表示其怒容。豈肯與蒼生作霖雨哉。

於時爲一千九百十四年九月初旬。歐戰方興。德兵已有侵入法境消息。郵電紛馳。幾如雪片。雖窮鄉僻壤間。電信不通之處。而郵遞函件。較之平

時。亦且増數十倍矣。故聖培爾村之郵局長。康德而女士。竟以煩勞致疾。臥牀不起。不得已。乃倩女郎媚莉墨林爲之代。(13頁,句点は原文のまま,以下同)

(ある日の午後、天気は蒸し暑く、温度計は95度以上で、風は全く無かった。太陽は隠れていたが、黒い雲が垂れ込め、空全体に幕が張られたようで、その暗さは人の気分を落ち込ませていた。木々はみな元気をなくした様子で、大雨が降るのを待っているようだった。実の所、神が人間に苦難を与えようとし、過酷なやり方を用いているのであった。戦争と旱魃は今なお止まず、こういう光景を作り出しているのは、神の怒りを示しているだけで、人間のために雨を降らせるはずは無かった。

時は1914年9月初めで、欧州大戦が始まったばかりだった。ドイツ軍がフランス国境から侵入したという知らせがあり、郵便・電信は、まるで雪が舞うかのように多く飛び交っていた。辺鄙な地方で、電信が通っていない所でも、郵便物は平時の数十倍に増えていた。それ故、聖培爾村の郵便局長、康德而は疲労からついに病気にかかり、寝たきりになった。そこで、やむを得ず、媚莉墨林に代理を頼んだ。)

このように中国語訳は自由に加筆している。冒頭を比較しただけでは、原作に気付かなかっただろう。

他に印象に残った加筆は、司祭と Cantel、そして Marie が話す場面で、原作は、Marie も自ら村に残ることを表明し、その後、郵便局長になるという Marie の夢が語られる(643頁左-右)。中国語訳は、そこになんと Marie の父が登場し、Marie が将来、局長(官吏)になるのを切望し、臨終の際にも、神にそれをお願いするという台詞まで加えている(15頁)。

誤訳を一例指摘しておく。前半の Chevilly からの電話連絡で、原作は、Chevilly の局にはフランス軍が駐在している(644頁右)。一方、中国語訳は、ドイツ軍が占拠したことになっている(18頁)。このため、Marie が最後に電話で Chevilly に助けを求める場面があるが、中国語訳はそのまま訳している(23頁)、つじつまが合わなくなっている。

省略も一例指摘しておく。原作では、Marie が旧約聖書に登場する Judith と Jael や歴史教科書の Joan of Arc や Jeanne Hachette の挿絵を思い出し、自らを鼓舞する場面がある(644頁右)。Marie に残っている幼さを示す面白い部分だと思うのだが、中国語訳は、挿絵のことは全く触れず、貞徳(Joan of Arc)だけ訳し、他は省いてしまっている(19頁)。

最後に、加筆をもう一例挙げる。最後の場面である。

He was not yet dead. Before he expired he heard Marie at the telephone.

“Come at once to our aid,” she

was saying. "The Boches are here."

When the postman came as usual for the morning collection, he found little Marie lying in a swoon by the side of a dead Uhlan with a knife in his throat. Mlle.Cantel, miraculously restored, had bolted the door of the room wherein the three drunkards still slumbered and snored.

And on the road leading from Chevilly French soldiers, with minds set at rest, were hastening to the rescue.(647頁右)

(彼はまだ死んでいなかった。死ぬ間際に Marie が電話に話すのが聞こえた。

「速く私達を助けに来て」彼女は話していた「ドイツ兵がここにいます。」

郵便局員がいつものように朝の集配に来た時、のどにナイフが刺さって死んでいるドイツ騎兵の横で気絶している Marie を見つけた。Cantel は奇跡的に回復し、三人の酔っぱらいがいびきをかいて眠り続けている部屋のドアにかんぬきをかけていた。

そして Chevilly から通じる道には、フランス兵が安心させようと、救助に急いで向かっていた。)

其時此大著作家。雖仆於地。然猶未死。昏瞶中猶見媚莉迴身握電筒。高聲曰：“有之。願君即派兵來救。”聲

斷續。含驚怖音。少年聞語。欲躍起奪其聽筒。顧力已不逮。而面色益白。直如素紙。胸次喘息亦微。蓋已死矣。媚莉迴首視之。乃作瘳笑曰：“萬惡之獮賊。汝亦有今日乎。嗟乎上帝。我願敵國之人。一一盡如此賊。”

一句鐘後。第見法兵已雲湧而至。媚莉亟趨迎而前。以素巾揮之曰：“日耳曼兵。已爲吾人殺其四分之一。餘人皆肩吾局中。趣往擒之。”

明日。聖培爾村。遂復安靜如恒。康德而病亦霍然。則攬媚莉於懷。而吻之曰：“吾法蘭西之靈魂。當在吾愛粉腦之中。”(23頁,コロン・引用符は補った)

(この時、大作家は倒れたけれども、まだ死んでいなかった。意識が無くなる中、媚莉が身を翻し電話機をつかむのが見えた。(彼女は)大声で「います。すぐに兵を遣って助けに来て下さい。」声は途切れ途切れで、驚きと恐れが含まれていた。男は聞いて、起き上がり、電話を奪おうとした。しかし、力は及ばず、顔は紙のように真っ白になり、息づかいも弱くなり、そして死んだ。媚莉は振り向いて見ると、残酷に笑い「大悪党め、お前も今日までだったな。ああ、神様、敵国の人間がみんなこいつのようになることを祈ります。」

一時間後、雲が湧き出るようにフランス兵が到着するのが見えた。媚莉はすぐに迎えに駆けつけた。白い布を振って「ドイツ兵は四人のうち私がすでに一人殺しました。残りは

局内に閉じ込めています。急いで捕まえに行ってください。」

翌日、聖培爾村はいつもの静けさを取り戻した。康德而の病気もけろりと治った。彼女は媚莉を抱き寄せキスをしながら言った「我がフランスの魂は正しくお前の心に宿っているよ。」)

こうなると、加筆ではなく、創作と言った方がいいかも知れない。

4

最初に述べたように、タイトルと前書の一致から、

フランス語原作(未見)

『“ The Soul of France Was in Her ”』

#### 《法蘭西之魂》

と判断した。しかし、中国語訳にあまりにも加筆が多いので、タイトルと前書だけ英訳を採用し、中身はフランス語原作を直接翻訳したのかとも疑ってしまう。ただ、加筆内容は、英訳と比べて、物語に適合しているとも思えないので、やはり中国語訳者の単なる加筆にすぎないと見ている。一応、これを確かめるために原作を読んでみたいものである。

なお、Tinayre 作品の日本語訳は、管見の及ぶ限りでは、

・谷口武訳『歸來』(『現代佛蘭西二十八人集』\*2新潮社,1923年6月6日,所収)

・堀口大學訳『キリアキ』(『毛蟲の舞踏會』青磁社,1943年2月10日,所収)\*3

の二作のみであった\*4。どちらも、《法蘭西之魂》と同様に、戦争を扱った短篇である。 罫

#### 【注】

- 1) 『世界女性人名事典』に拠る。英訳前書は、1877年とし、『フランス文学辞典』(429頁)は、1872年とする。
- 2) 奥付は『佛蘭西二十八人集』とする。
- 3) 初出未見。『堀口大學全集』補巻2 (小澤書店,1984年6月30日)所収を使用。
- 4) 余談であるが、日本語訳を調べる際、戸惑ったのは、Tinayre のカナ表記である。「チナイル」(谷口訳)、「ティナイエエル」(堀口訳)、「チネール」(『フランス文学辞典』)、「ティネア」(『世界女性人名事典』)、と各人各様であった。

#### 【参考文献】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》浙江古籍出版社,1993年5月

Jean-Pierre de Beaumarchais ほか  
『Dictionnaire des Littératures de Langue Française』(P-Z)Bordas,1984年

Winifred Stephens 『French Novelists of To-day』(Second Series)John Lane,The Bodley Head,1915年?

世界女性人名事典編集委員会『世界女性人名事典 - 歴史の中の女性たち - 』日外アソシエーツ,2004年10月25日  
日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』白水社,1974年9月5日

眾所周知，中國最早出版刊行的四部福爾摩斯小說連載於1896至1897年的《時務報》，這四部中譯的細目如下：

張坤德是《時務報》福爾摩斯故事的唯一中譯者嗎？

這四篇福爾摩斯系列故事都是刊登在“英文報譯”一欄，雖然作品的譯者沒有署名，但是在報紙的目錄部分，“英文報譯”欄目的署名是“張坤德”。所以，通常意義上《時務報》上這四篇福爾摩斯故事的中譯者被認定是報紙的英文報譯張坤德，過去所疑慮單行本署名的“丁楊杜”事件，迄今為止被認為是阿英錯記了\*<sup>1</sup>。

郝 嵐

中譯名	中譯本署名	英文名	今譯名	《時務報》	Strand Magazine (U.K)	Happer's Magazine (U.S.A)	英文本收錄結集
《英包探勘盜密約案》	“譯歇洛克呵爾唔斯筆記”	《The Adventure of the Naval Treaty》	《海軍協定》	1896年9月27日至10月27日（第6-9冊）	1893年10-11月	1893年10月14-21日	1894, Memoirs of Sherlock Holmes（《福爾摩斯回憶錄》）
《記偃者復仇事》	“譯歇洛克呵爾唔斯筆記，此書滑震所作”	《The Adventure of the Crooked Man》	《駝背人》	1896年11月5日至25日（第10-12冊）	1893年7月	1893年7月	1894, Memoirs of Sherlock Holmes（《福爾摩斯回憶錄》）
《繼父誑女破案》	“滑震筆記”	《A Case of Identity》	《身份案》	1897年4月22日至5月12日（第24-26冊）	1891年9月	1891年9月	1892, The Adventures of Sherlock Holmes（《福爾摩斯冒險史》）
《呵爾唔斯緝案被戕》	譯滑震筆記”	《The Adventure of the Final Problem》	《最後一案》	1897年5月22日至6月20日（第27-30冊）	1893年12月	1893年12月	1894, Memoirs of Sherlock Holmes（《福爾摩斯回憶錄》）

張坤德，浙江桐鄉人，曾在上海廣方言館學習英文。《時務報》上“域外報譯”、“西文報譯”、“英文報譯”欄目大多是他一人承擔。所以一般認為《時務報》上的四篇福爾摩斯偵探小說的譯者就是他，但筆者以為此說值得推敲。雖然目前所存史料中關於張坤德的生平、譯作及相關記錄非常少，但是我們不妨從這四部翻譯文本本身去尋找證據。

從發表順序上說，《英包探勘盜密約案》之後，《時務報》又相繼連載了《記僞者復仇事》、《繼父誑女案》、《呵爾唔斯緝案被戕》三篇。縱覽這幾篇，有很多翻譯的原則是非常遊移的，前後標準不一。這是否證明中譯者並非張坤德一人呢？

#### 其一、開端詳略處理不同

《記僞者復仇事》(《駝背人》)是發表的第二篇中譯福爾摩斯故事。原作《駝背人》的開端，福爾摩斯深夜來訪，見到華生之後就炫耀時的展示他的推理技巧。一開門，福爾摩斯問華生怎麼還在吸一種阿卡迪亞混合煙 - 這是從落在他衣服上的煙灰判斷的；福爾摩斯還提醒華生說至今他還一望便知是個從過軍的人，因為他還總是習慣於把手絹藏在袖口中，而不是像平民那樣放在口袋裏。這兩個細節都是福爾摩斯小小的推理技巧展現，中譯本《記僞者復仇事》中這一段省略了。大概是譯者覺得這一段古怪又突兀，相對於後邊的類似推理，顯得即多餘又不足為道。不過好在，這兩個小推理的省略，不足以損害福爾摩斯的高超能力。

進了門，福爾摩斯仍然不斷展示他的推理本領：他判斷客人房沒有住人——因為衣帽架上空的；他發現華生家來過修理

工人——因為鋪地的漆布上留下兩個鞋釘印；他得知華生最近醫務繁忙——這是華生的靴子透露的。這三件事中譯本都保留了，但是前兩件事，譯者都使用了添譯加注的方法。“今晚當無客，帽擎已告我矣”。後邊小字加注云：“西俗客入大門則脫帽置帽擎上，是時帽擎上無帽，故云”。對於並不習慣在入門處放置衣帽鉤的中國人，無法理解依照門口的一件擺設判斷房間裏有沒有客人來訪，自然需要加以說明。第二件以鞋釘印判斷來過修理工，也是出於類似需要，中譯者加注釋寫道：“工人儉，靴破或未易釘，印較鋸”。不過在此之前還有一個注釋：福爾摩斯判斷說：“汝雇英國工人做工，誠大費”。後邊加注釋：“英工人貴于他國，故云”。這裏何來花費問題？原文是福爾摩斯發現來過工人，說：“He's a token of evil.”（“他是個不幸的象徵”）因為這意味著華生家裏一定有些設施壞了。我認為這裏是譯者的錯譯，他一定是把“token”（標誌、象徵）理解成了“take (of)”（花費）的過去完成時“taken”為了自圓其說，譯者只好添譯加注。

《呵爾唔斯緝案被戕》幾乎是翻譯的最詳備的一篇。這篇中譯在開端部分比起其他三篇都更為忠實。即使是看似沒用的細節他都沒有省略。這或許也是為什麼在最初的這四篇福爾摩斯中譯中，《記僞者復仇事》、《繼父誑女案》和《呵爾唔斯緝案被戕》的英文原本篇幅相當（《海軍協定》篇幅稍長一些，因此中譯本連載了四期），前兩者都是連載三期就結束了，但是《呵爾唔斯緝案被戕》卻連載了四期。

《呵爾唔斯緝案被戕》的開頭談到

為什麼華生選擇這個時候宣佈這件事？因為莫里亞蒂教授的兄弟一再混淆視聽；報紙上的幾篇報導也語焉不詳或者極盡歪曲事實之能事。這一部分有很多時間、地點、報紙名等等。按照慣常的中譯原則，這一部分完全可以省略，直接寫有一天福爾摩斯突然造訪華生的診所，“貌較昔瘠而黃”（《時務報》第27冊）。因為既然《繼父誑女案》的開頭可以省略兩人討論報紙上的犯罪報導與偵探小說的取捨問題、《記僂者復仇事》可以在開端省略兩個福爾摩斯推理法的神奇小例子，那麼《呵爾唔斯緝案被戕》中，這一部分也完全可以去掉而不會特別影響效果。

但是在《呵爾唔斯緝案被戕》的一開始，一直到滑震與呵爾唔斯出發，大約有7個頁碼，英文約1萬5千字，中譯本幾乎是巨細靡遺地翻譯了出來。（當然由於中文使用的是半文言，字數大大縮減。）這相對於《時務報》上連載的前三個中譯福爾摩斯小説是不多見的。單憑這一點還不足以證明四篇作品的譯者並非一人，所謂孤例不為證。我們當然也可以把這理解成，中譯者隨著翻譯經驗的豐富，或者讀者回饋的良好，已經開始調整翻譯策略。不過看到如下兩種原則的變動不居就很難不提出如題的疑問了。

其二、如何彌合文化空白與差異的原則遊移

樽本照雄先生以為從《記僂者復仇事》這一篇起，中譯者加注表明了譯者的忠實原文的意識\*2。我以為不儘然。因為在第一篇《英包探勘盜密約案》中作者也在部分地方加了注釋，例如華生的同學名字忒坡爾，解釋說：“此系綽號，譯即小蛤

蚧”（《時務報》第6冊，P17）。這已經是對辭彙中的隱含義有所注意了。還有對股票（中譯“撮香生意”）的解釋“如買先令票之類”（《時務報》第9冊，P18）。也是出於填補文化空白的意識，它的動機與《記僂者復仇事》中解釋衣帽鉤是一樣的。所以，譯者渴望比較忠實于原文的意識從第一篇福爾摩斯故事的中譯中就已經展現了。譯者不僅要想做到等值，有時還想做到等效，雖然這一原則標準的底線總是滑動，譯者也並沒有非常執著的一直堅守這一原則，證據是《記僂者復仇事》的結尾。

《記僂者復仇事》末尾解釋為何巴克雷夫婦爭吵時會提到“豆末特”（David，大衛）時，涉及到中西文化衝突中最常見的宗教問題。《聖經》記載大衛王當年因為覬覦著自己手下赫梯人的將領烏利亞（Uriah）的妻子拔示巴（Bathsheba），於是故意將烏利亞派往前線，烏利亞最終遇伏被害。這個故事對於西方讀者來說，是一個耳熟能詳的文化典故。因為小說情節與大衛王的故事非常相似：後來聲名顯赫、德高望重的將軍早年就是用這樣的計謀暗算情敵，不光彩地攬獲芳心，所以具有特殊的意義。但是中譯本《記僂者復仇事》結尾只是照直翻譯：“汝記由力裏與拔士戲拔事否？試在《聖經》講‘三妙爾’之一二節求之即得矣”。至此全篇結束。這裏因為有文化差異與文化空白的中間帶，所以是最需要添譯或者加注的，譯者卻偏偏沒有加注，相信是譯者自身也並不清楚，或者沒有現成的東西可以查詢，又或者是譯者態度較為隨便，不覺得不加解釋就會妨礙中國讀者理解。

然而，在《繼父誑女案》的結尾，

福爾摩斯說了一句波斯諺語“打消女人心中的癡想，險似從虎爪下搶奪乳虎”。

(There is danger for him who taketh the tiger cub, and danger also for whoso snatches a delusion from a woman.) 相信這個諺語是不難翻譯和理解的，但是關鍵是他所提到的兩個人波斯詩人哈菲茲 (Hafiz) 與羅馬詩人賀拉斯 (Horace)，對於中國近代讀者完全無從得知，所以在這一部分，中譯者乾脆將言語和人名一概省略。

其三、對福爾摩斯系列小說的互文性關係的處理不同



《繼父姪女案》的原本是《身份案》，發表於1891年9月的《河濱雜誌》(Strand Magazine)，1892年收錄於《福爾摩斯冒險史》。在這部英文原著中華生提到了福爾摩斯系列故事中的其他案件。情節是在福爾摩斯決定先發兩封信以探得溫蒂班克先生的虛實，華生有一段心理活動：“我

有很充分的理由相信我的朋友在行動中是推理細緻、精力過人的……當我回顧‘四簽名’那種怪事以及與‘血字的研究’聯繫在一起很不尋常的情況時，我覺得如果連他都解決不了的話，那真是十分奧秘的疑案了”<sup>\*3</sup>。《血字的研究》是福爾摩斯探案系列的第一個故事，發表於1886年，1888年出版單行本；1890年《四簽名》最初在美國費城的《利平科特雜誌》上發表，同年單行本印行。這兩部小說都是長篇，也是為柯南·道爾帶來聲譽的作品，案件的離奇為偵探福爾摩斯在讀者中建立了最初的聲望。《身份案》是連載於《河濱雜誌》上的諸多短篇中的一個，華生再次提起最初的這兩個案件，一方面是確證福爾摩斯的能力，另一方面，也是更重要的作用是使得讀者再次加強了福爾摩斯探案作為系列小說的聯繫。

在1897年的中譯本《繼父姪女案》中，這一段有關福爾摩斯系列小說的互文性內容被刪去了，中譯者將一段心理活動減縮為兩句話：“餘即行，自念明晚來，賀（賀司默哀及兒，即那位繼父化妝扮演的人）蹤跡應洩露於呵”（《時務報》第26冊，P16）。這種省略完全可以接受。因為不僅是中國讀者不會明白這個互文性的意義，相信就是譯者本人也很難知道《血字的研究》與《四簽名》對於西方讀者和現代偵探小說的意義。

但是非常難於理解的是，在《呵爾唔斯緝案被戕》一開始，滑震回憶“余友呵爾唔斯，夙具偉才”，然後如英文本所言追述他從最初的《血字的研究》到《海軍協定》的成績，他說：“自第一章考驗紅色案起，至獲水師條約案止”（《時務

報》第27冊，P17)。同樣是處理一個沒有譯介過的早期案件，《繼父誑女案》中把它省略了，而《呵爾唔斯緝案被戕》中卻把它譯為《考驗紅色案》。

《海軍協定》的中譯本在1896年9月發表時被稱為《英包探勘盜密約案》，時間間隔不足一年，1897年5月的《呵爾唔斯緝案被戕》再提到這個名字時卻翻譯成《獲水師條約案》。如果是同一個譯者，相信他的記憶不會如此差，除非他的翻譯態度是不嚴肅的，只是隨看隨譯，不肯思考他是否以前也碰到過類似辭彙，或者盡力做到與先前處理方法一致。當然這裏也有一個疑點：如果《呵爾唔斯緝案被戕》的中譯者沒有讀過《英包探勘盜密約案》那麼他就對《海軍協定》的故事無從瞭解，翻譯的時候就不會譯出有關情節的內容。“獲水師條約”意味著他是瞭解這個故事的，不然他應該只是照字面意思 *The Naval Treaty* 翻譯為《水師條約》，就如同他只能把 *A Study in Scarlet* 翻譯為《考驗紅色案》，因為他不知道 *Scarlet* 在小說中是一個用血寫成的字。

以上分析可見，四篇福爾摩斯故事的中譯，存在相當多的原則不一致，我們有理由懷疑張坤德並不是這四個故事的唯一中譯者。 罍

#### 【注】

- 1) 具體考證參見樽本照雄：《漢譯福爾摩斯論集》，(日本)汲古書院，2007，P77-79。
- 2) 參見《漢譯福爾摩斯論集》，P69-70。
- 3) 《福爾摩斯探案全集》(上)，群眾出版社，2000，P300。

## 《冲积期化石》决非新文学史上 第一部长篇小说

附论《盛京时报》五四前夕刊出的几部白话长篇小说的文学史意义

王 金城

【提要】张资平的长篇小说《冲积期化石》，曾经长期被现代文学界称作“中国新文学史上第一部长篇小说”。其实这并不合乎历史事实。仅就沈阳出版的《盛京时报》，在此之前就发表了穆儒巧的白话长篇小说《女优》、《梅兰芳》、《香粉夜叉》，以及冬斋的白话长篇小说《糊突谈》。这几部长期被人忽略的作品，其水平绝不在五四以后逐渐成熟的白话长篇小说之下，我们虽不敢也无意断言它们才是最早问世的所谓“中国新文学史上第一部长篇小说”，但是，这项“桂冠”也决不该戴在《冲积期化石》身上。

【关键词】《冲击期化石》 现代长篇小说 《盛京时报》

二十世纪八十年代以后，一部在中国现代文学史上只是偶然提及但遭贬抑的长篇小说《冲积期化石》，突然之间备受关注，引发对其思想价值和历史影响的重新认识，进而被推至颇为显要的地位，被誉为“我国现代长篇小说的第一部开山之作”<sup>\*1</sup>、“中国新文学史上第一部长篇小说”

说”<sup>\*2</sup>、“新文学史上第一部长篇”<sup>\*3</sup>等。尽管描述略有差异，却一致推崇有加，似成定论，无庸质疑。然而，若将《盛京时报》前此连载的《女优》、《梅兰芳》、《香粉夜叉》和《糊突谈》等长篇小说与之进行比照分析，则加冕于《冲积期化石》的“第一部”桂冠，也便失去了它存在的客观事实依据。

《冲积期化石》是前期创造社的小说家张资平的首部长篇小说。1921年，张资平赴日留学时便已开始动笔创作，当年秋脱稿，初名《他的生涯》，后改为《冲积期化石》，由郭沫若将书稿寄回上海，1922年春由上海泰东书局正式出版。它确实问世较早，但绝非最早。至少，穆儒丐在《盛京时报》发表的长篇小说《香粉夜叉》问世便远比其早，以致高翔先生冲动地认为“中国现代文学史上第一部长篇小说”的桂冠，应该戴在《香粉夜叉》的头上：

“中国现代长篇小说的开端是以张资平的《冲积期化石》和王统照的《一叶》的问世为标志的。这是被目前的几乎全部新文学史著作所认定的结论……然而，当我们翻检五四时期的东北新文学作品，却惊奇地发现，早在1919年11月18日至1920年4月21日，穆儒丐创作的长篇小说《香粉夜叉》便连载于《盛京时报》。它比《冲积期化石》和《一叶》的出版时间，提早了大约两年。从这个单纯的意义上讲，东北现代长篇小说的的确确实实在在地应列居于新文学史的显赫位置。我们由此可以推断出一个新的文学史

结论：《香粉夜叉》乃是中国现代文学史上第一部长篇小说。”<sup>\*4</sup>

这一结论，对于纠正已往的武断结论很有冲击力，但是却又留下新的武断结论，同样没有扎实的根据，同样有些莽撞冒失。仅从发表时间来说，早在五四前夕，《盛京时报》已发表了四部很有文学价值的白话长篇小说，即穆儒丐的《女优》、《梅兰芳》、《香粉夜叉》和冬斋的《糊突谈》。因此，“第一部”之说冠之于《冲积期化石》，颇难名实相副。至于《香粉夜叉》，恐怕也很难获此殊荣。

当然，仅以时间要件为据作出结论，未免过于简单草率，最重要的还在于分析作品是否具有现代性的思想内容、艺术形式和语言载体，即是否属于“现代小说”，也就是要追究一下作品本身的“现代性”如何。

《冲积期化石》是一部现代白话长篇小说，文学史界对此已有定论。这一结论是否正确，当然可以讨论，但它为什么会得到肯定么，却不能不认真分析。这部作品采用第一人称的叙述视角，将清新流畅、通俗易懂的白话文作为小说的语言材料，以“我”和一起长大的朋友相携赴日留学的经历为线索，描述了留学前后国内外生活的若干片断，真实地反映了中国留学生的艰难生活、与日本普通人的交流往来、青年男女作为人的权利遭受侵害的残酷现实。它通过“自叙传式的抒写将人生旅途的艰辛、孤独、寂寞、迷茫情绪与青春期性苦闷调和在一起，更增加了感情表现的厚度与力度”；“对辛亥革命前后的教育界、政治界和家庭制度都有所针砭，表现出作

者的民主主义倾向，说明作者在自我情绪表现中并未忘记应有的社会批判。”\*5因而，其形式与观念才会被世人认作现代的标本。

不妨再看看《盛京时报》先期发表的几部长篇小说。《女优》于1918年4月2日以“六十二”始刊，同年6月30日以“百三十七”结束，前61期遗缺未见。这是一部白话长篇社会小说，从连载部分来看，主要讲述的是陷入不幸婚姻的女优杜云红得到记者颀项生相助，提起离婚诉讼，重获自由身后与颀项生疏远，被老母与兄长撻掇掌控，与早已觊觎其美色的京城大腕鬼混享乐的故事。《梅兰芳》于1919年1月1日以“四十八”始刊，同年4月6日以“百二十一”结束，前47期遗缺未见。据考，它出版过单行本，樽本照雄先生的《新编增补清末民初小说目录》便著录道“盛京时报社1919.8.20/1920.4.1再版”\*6这是一部白话长篇章回体传记小说，从连载部分来看，主要讲述的是梅兰芳成名后与京城阔佬、名士、戏评人以及狂热追求者之间发生的错综复杂的生活故事。

《香粉夜叉》与1919年11月28日始刊，1920年4月22日以“一二三”号结束，但中间缺失多回。小说以沈阳为舞台，通过一对青年男女学生的悲惨恋情，真实地揭示了当时的社会矛盾。

这三部作品虽然在主题表现、题材选择、人物塑造、叙说方式、艺术表现手法以及白话运用上均有瑕疵，质量不高，但毕竟体现出较为明显的现代小说的特征，在当时也确有一定的影响，如《梅兰芳》刊出后，便有多人写诗向作者表示祝贺。因现存报纸不够完整，原作全貌难窥，也

就不再详细分析了。

至于《糊突谈》，因其鲜为人知，还需加以较为全面的分析描述。作品于1919年5月23日始刊，12月28日终刊，重“二十四”，缺“三十三”与“六十二”，共载66期。这也是一部白话长篇小说，主要叙述的是“我”(精神病经常发作者)亲身经历和耳闻目睹而让“我”愈发糊突疑惑的各种扭曲的现实人物与生活现象。故事的大致梗概是：我上街闲逛，在使我糊涂的处所，结识了墨镜先生，一起听乡下老头讲述大家都很糊涂的事：他的几垄地被人抢占，去打官司，人家请了“绿石”老爷，结果真地契被判成假的，输掉官司；在学堂读书的姑爷通过官府，休掉他的女儿，女儿改嫁他人，却被姑爷告个与人私奔，被官府判令由原夫带回。途中躲雨，听俩老太闲聊：小女孩进了新学堂，跟老老师私通怀孕，甘心为妾。第二天，我来到酒楼，看到盛大的宴客场面，由此听说了富甲东方老财主的事：他的手下开设赌场，“法师”带领数十警兵前去查办，竟被打得跪地求饶，住院半年，亲自登门道歉，才得平息矛盾。前几天还很阔的老发，突然前来蹭饭，我很糊涂地将他送走，来到茶馆，与墨镜、霞阁闲聊。霞阁讲起他知道的事：五个身份不同的人结拜后，其中的客商趁战乱办起了大军火公司，大发横财，当上比肩兵部尚书的高官；街流兽医升任太医院院长；宰牛的大屠投军，凭着战功升迁，地位相当于王侯；杀猪的小屠落草又被招安，执掌了帅印。入夜，我和墨镜被警士赶出茶馆，来到大街上，又被宵禁的警兵捆绑，搜去大洋票，拘禁起来，幸得墨镜私塾弟子帮助，免遭牢狱之灾。

此后，我又听闻了朋友父子间的争吵：父亲要卖掉西服换大烟，留学归来的儿子阻止，说是留着等觐见大总统时穿，父亲却称必须要穿官服。

说起来，《糊突谈》完全可以划归为五四新文学革命中兴起的问题小说之列，因为它带有五四文学即现代小说追求的明显特征：既具有理性精神的张扬，又具有感伤的精神标记。从主题和题材上看，这部小说立足社会现实，关注民生疾苦，针砭社会痼疾，表现出人道主义、民主主义精神，涉及到了农村土地的纠纷、家庭婚姻的矛盾、民事诉讼的程序、法庭审判的昏庸、学校管理的混乱、黑社会的发迹风光、黑社会内部的明争暗斗、黑白两道的颠倒妥协，以及就业失业、吸食毒品、新式教育、社会秩序等诸多问题，采用客观写实的手法，比较真实地描绘出各种扭曲的现实社会生活现象杂糅融合的画卷。这里，无疑充满着另类的理性批判意识，又流露出似乎无路可走的苦闷、彷徨、感伤的情怀，是充满各种矛盾的社会现实和作家热心求索的创作心态碰撞的产物，也是五四启蒙精神和作家的社会生活思考相结合的产物，颇能适应当时的社会精神心理的迫切需求，而不再将小说作为茶余饭后娱乐消遣的形式提供给读者。

从艺术表现形式看，这部小说采用的也是第一人称“我”的叙说方式，但这个“我”不是一个正常人，而是一个“精神病经常发作者”，与鲁迅先生《狂人日记》中的狂人颇有几分相似。“我”既然精神病经常发作，理所当然地可以任意闲逛，多心猜疑，寻根究底，甚至于躲屋檐偷听他人闲聊而无所顾忌。因此，也更容易搜

集到五花八门的社会传闻，更便于将诸多超越时空、散乱杂糅的生活素材自然地连缀起来，构成一个有机的艺术整体，以表达创作主旨；同时，又能缩短与读者的距离，给读者留下自然、真实的感觉。“我”“揣着明白装糊涂”，叙述使“我”糊涂发傻的错综复杂的生活事件与社会现象，更能启发读者进行理性思索，也为作品增加了些许戏谑色彩。小说开篇不用入话，不做人物介绍，也不事议论，而是一反传统，截取生活的横断面，突兀起笔，直接叙述“我”来到使自己糊突的处所，见到糊突的人物，听起了令人糊涂的故事。作品通篇都是“我”以亲历者或见证人的身份进行客观叙说，而未见议论、旁白等非情节因素的插入。小说如此进行艺术处理，明显打破了中国传统小说的固有格式，更多地融合了现代小说的手法，颇能新人耳目。

与作品的主题、题材和艺术形式恰相适应的是，作者摆脱了文言文的影响，采用了当时大力提倡的白话文语体，运用现代白话来叙述故事、刻画人物。例如，叙述“我”夜行被抓的一段文字：“街上是车影也靡有。三三五五的，都是手内端着枪，走不几步，就遇到一起，大声说：‘站下！站下！’我们二人就站下了。人家问：‘你们是做什么的？’我一时张荒，言语失措，说我是当教员的。人家问在哪学堂，我赶紧的改嘴说：‘我是个买卖人。’人家就把我的胳膊给背过去，拿了条绳子绑上啦，我也靡敢吱声……（把我）送到一个去处，将衣裳给脱了，浑身上下给翻了个到，眼睛瞧着。我那破钱夹里二张十元一张的大洋票，让那个矮个人、

容长脸的给袖起来了。也是我一时的聪明，把头低下，靡敢看那人。”纯用白话，自然，平易，流畅，很接近生活和普通民众，不仅真实地再现了“我”经历的生活事件，也较为成功地刻画了“我” - “精神病经常发作者”思维混乱、行事异常的特点。

当然，《糊突谈》也存在着与《冲积期化石》大致相同的明显缺憾，如内容芜杂、结构散漫、艺术表现有欠灵活等，但无可否认的是它毕竟属于具有一定思想意义和认识价值的现代长篇小说。

综上所述，尽管冬斋的《糊突谈》与张资平《冲积期化石》的社会意义、认识价值和社会影响有所差异，但无疑同属于现代小说品类，且领先数年间世。因此，“新文学史上第一部长篇小说”之于《冲积期化石》，实在难以名实相副；若称其为“新文学史上第一批最为重要的长篇小说之一”，或许更为客观稳妥。当然，还需指出的是：笔者无意为某一作品争得某种冠名，只是意在证明有关《冲积期化石》提法的不甚稳妥，认为关于“现代文学史上第一部长篇”的归属问题尚待深入研究，只有更充分地掌握了资料，方可得出符合客观史实的结论。

这里，附带提及这样一个问题：早于《冲积期化石》发表的现代长篇小说，虽然为数寥寥，但毕竟确实存在，何以最初学界即将“第一部”加冕于《冲积期化石》？究其原因，恐怕大概有三条：一是发表《糊突谈》等作品的《盛京时报》为日本商人投资创办，因此当时的文人有意回避，免遭汉奸嫌疑；二是当时的作家、评论家主要萃聚云集于上海、北京，一时形成创作与评论的鼎盛局面，而冬斋、儒

丐等东北作家，相对被当时的主流文坛忽略，关内学界无暇留意关外“文化沙漠”中《盛京时报》上悄然开放的新文学之花。三是最初已有权威研判，于是便被众人广为接受因袭，以致莽撞之言遂成定论。无论出自何种原因，相关误解都会妨碍人们对中国现代文学做更深入的研究，造成某种缺憾，故应当引以为戒。本文的辨析并不想冒犯前贤，有所纠谬不过就事论事而已。

罍

#### 【注释】

- 1) 秦柯：《扑朔迷离的张资平》，《南方日报》1999年6月17日。
- 2) 孙志军：《张资平作品精选·序》，长江文艺出版社2003年版。
- 3) 朱栋霖等主编：《中国现代文学史》（上册），高等教育出版社2002年版，第55页。
- 4) 高翔《现代东北的文学世界》，春风文艺出版社2007年12月第1版，第65页。
- 5) 巫小黎：《张资平小说思想价值与历史影响的再认识》，《广东社会科学》2006年06期。
- 6) 樽本照雄《新编增补清末民初小说目录》，齐鲁书社2002年4月第1版，第462页。

晚清小説作者扫描 (貳拾肆)

武 禧

(一二六)

痛哭生第二

小説创作:《仇史》

痛哭生第二:真实姓名不详。

中国近代署名“痛哭生”者有赵声、丘逢甲二人,但“痛哭生”与“痛哭生第二”是否同一人,尚待考证。将赵声与丘逢甲二人简况录于下:

赵声(1881-1911):江苏镇江人。原名毓声,字伯先,号百先。别署天水王孙、雄愁子、痛哭生、刘意扬、天香阁主人等。少怀大志,17岁中秀才。1901年入江南水师学堂和陆师学堂,开始接触资产阶级民主政治学说。1903年,东渡日本考察,结识黄兴,后回国任南京两江师范教员和长沙实业学堂监督。撰写七字唱本《保国歌》秘密散发。曾任江阴新军教官、广西巡防营管带等。秘密传播革命思想,积极策动反清武装斗争。1906年春,在南京加入同盟会。1907年任标统。1907年回归故里。1909年参与策划指挥广州新军起义,失败,逃到香港。1910年,与黄兴等再次筹划广州起义,任统筹部副部长。撰写

《歌保国》发表在《民立报》。1911年发动辛亥广州起义,赵为起义军总指挥,但因寡不敌众而告失败。1911年病逝于香港。1912年被南京临时政府追赠为陆军上将。

丘逢甲(1864-1912):广东蕉岭人。字仙根,又字吉甫,号蛰庵、仲阕、华严子,别署痛哭生、海东遗民、南武山人、仓海君。1887年中举人,1889年登进士,授任工部主事。但丘逢甲无意在京做官返回台湾,后到台湾台中衡文书院担任主讲,在台南和嘉义讲授新学。甲午战争后,组织义军反抗,任义勇军统领。失败后携带家眷内渡广东任兴民中学首任校长。1911年被选为广东省代表参加孙中山组织的临时政府。1912病逝。有《蛰庵诗存》、《仓海先生丘公逢甲诗选》、《岭云海日楼诗钞》等。

(一二七)

时报馆记者

小説创作《白云塔》

陈景韩(1878-1965):上海松江人。又名陈冷。笔名冷、冷血、不冷、华生、无名、新中国之废物等。任职《时报》时,常署“时报馆记者”。清季秀才。1900年经钮永建介绍,进武昌武备学校。后因参加革命会党,被清政府侦知,赴日本暂避。1904年回国初任上海《大陆报》记者。后《时报》在上海创刊,受聘为该报主笔,锐意进行业务革新,除创设“专电”、“特约通讯”等专栏外,还开辟“时评”专栏,每日写一短评,针对当时收回粤汉铁路权的斗争和抵制美货运动等事件,抒发议论。善写小説,与包天笑合编《小説时报》。1913年,受聘《申报》,任该报总

主笔。主张以爱国爱民、独立不偏为立场；以“确”、“速”、“博”三字为办报要点，成为舆论界权威之一。又主编早期《申报·自由谈》。袁世凯称帝时，他在《申报》连续发表时评，反对帝制，拥护民主共和。1924，浙江军阀卢永祥预谋发动战争，陈撰写时评《戎首》，表达了民众的呼声。《申报》在史量才和他的合作下，成为经济独立、业务发达的全国著名报纸。1927年，对蒋介石控制、检查新闻等政策不加反对，和史量才时有争论。1930年辞去《申报》总主笔职务，担任中兴煤矿公司董事等职。抗日战争胜利后，《申报》由国民党CC系掌握，请他续主报事，坚决不应。解放后，曾任上海市政协委员。

陈景韩著述甚丰，可以分为两大类，一对时政的评论，一为小说。其小说翻译、创作、译述并重、长短篇兼有。以下为部分小说情况：

创作小说：《百年之侠客谈》《爆裂弹》《拆字先生》《刺客谈》《催醒术》《刀余生传》《儿戏》《飞城花主》《非洲壁石》《军装》《空中行动》《牢狱世界》《路毙》《卖国奴》《馒头大协会》《名片》《某客栈》《某业》《某县令》等。翻译和译述小说有：《巴黎之秘密》《白格》《白云塔》《错恨》《大村善言》《俄帝彼得》《俄国皇帝》《俄国之红狐》《格儿奇特》《关口太三郎》《黑面塔》《环球旅行记》《火里罪人》《决斗》《聋裁判》《落勃脱》《吗啡案》《卖解儿女》《梅脱》《美国之第一纪念日》《美人狩》《明日之战争》《莫爱双丽传》等。

(一二八)

浪荡男儿

小说创作：《上海之维新党》

叶景范(?-1922年后)：浙江杭州人。字少吾。别署沈希渊、浪荡男儿。少有才名，被世人所知。曾任甘肃省实业厅长。著有《上海之维新党》(又名《新党嫖界现形记》)。

(一二九)

顽石

小说创作：《情天恨》

顽石：真实姓名不详。

近现代以顽石为笔名者至少有8人：陈独秀(1879-1942)、何亚农(1880-1848)、周作人(1885-1967)、钱厚贻(生年不详-1932)、张廷璽(生卒年不详)、黄思睿(生卒年不详)、石凌鹤(1906-1995)、秦牧(1919-1992)。以年龄论，后二人应予排除。存六人简况于下。

陈独秀：(见笔者《晚清小说作者扫描【贰拾壹】·一零四》)

何亚农(1880-1948)：山西灵石人。名何澄，号亚农。别署顽石、真山。早年留学日本，毕业于日本陆军士官学校。早期同盟会会员，“铁血丈夫团”骨干。曾为蒋介石的老师。辛亥时期任沪军督府参谋长。收藏文物书画甚富。1940年购得苏州网狮园，全面修整。

周作人(1885-1967)：浙江绍兴人。原名櫛寿、后改为奎绶。字星杓，又名启明、启孟、起孟，号知堂、药堂等。笔名遐寿、仲密、顽石、岂明，幼年接受传统的汉学教育。1901年到南京进入江南水师学堂，有了相当的英文基础。后留学日本，

读法政大学预科。与其兄周树人一起翻译出版了《域外小说集》。1911年回国任浙江省教育司视学。1917创办北京大学东方语言文学系，出任系主任。1919年起任中华民国教育部国语统一筹备会会员。1925年在女师大风潮中，支持进步学生。1937年卢沟桥事变后，北京大学撤离北平，受校长的委托看守校产。1939年接受汪精卫南京政府国立北京大学图书馆馆长的聘书。1945年在北京以汉奸罪名被国民政府逮捕，判处14年徒刑，1949年释放出狱，从上海回到北京，专心翻译和写作，以稿费维持生计。1967年病逝。

钱厚贻(生年不详-1932):浙江平湖人。字鸿宾，一作鸿炳，别署红冰、顽石，南社社员。骈散文都很出色，诗近晚唐风格，参加东林诗社。平生嗜酒，喜爱半醉时提笔作诗，顷刻而成。

张廷璠(生卒年不详):广东人。字石朋。笔名顽石。曾任《商务报》主笔。主张改良主义。后参加革命党。其文章发表在莫梓车主办的《半星期报》上，反映出激进的思想。出版有《中国实业思想论》、《家政用财学》等。

黄思睿(生卒年不详):浙江平湖人。原名景恒。字石生、山厓。号辅仁、顽石。别署梦花生、梦花子、梦花居士。清末诸生。善书画。 ㊦

## 清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します。

王 向遠 第1章頭二十年(1898-1919)世界視野的形成と比較文學の發生  
『王向遠著作集』第6卷中国比較

文學百年史 銀川・寧夏人民出版社2007.140

藤井得弘 探偵の発見 吳趼人『中国偵探案』を手がかりに 北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第25号 2009.3.31

「探偵」のいない「探偵小説」

周桂笙「上海偵探案」の試み 北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第26号 2009.9.30

「茶花女」と恋に落ちた「探偵」

天民「失珠」の特徴について 北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第27号 2010.3.25

陳青生主編 『画説上海文學』 上海文藝出版社2009.10

松田郁子 吳趼人の「悪党小説」 『関西大学中国文学会紀要』第31号2010.3

日野杉匡大 自伝的な、あまりに自伝的な蘇曼殊『断鴻零雁記』をめぐる言説 北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第27号 2010.3.25

藤元直樹 明治ヴェルヌ評判記『鉄世界』編 『EXCELSIOR!(エクセルシオール)』第4号 2010.4.30

郭 延礼 南社作家呂碧城の文學創作及其詩學觀紀念南社成立一百周年『文學遺産』2010年第3期2010.5.15

謝 仁敏 “頂蒼園”非張春帆考 『文學遺産』2010年第3期2010.5.15

張 偉 都德《最後一課》漢訳瑣談 『出版史料』2010年第2期(新総第34期)2010.6.25

陳 大康 《民立報》与小説有關編年 『明清小説研究』2010年第1期(総第95期) 2010発行月日不記

施 曄 從《東京夢》到《留東外史》:清末民初留日小説の濫觴和發展 『明清小説研究』2010年第1期(総第95期) 2009発行月日不記

『福建工程学院学报』8卷2期(総第42期) 2010.4.10

林紆的“中学”觀 ……………張俊才

略論林紵花鳥画の演变 ..... 龔任界  
 林紵在京寓所新考 ..... 蘇建新

『中国現代文学研究叢刊』2010年第2期(総  
 第133期) 2010.3.15

蘇菲亜形象的伝入与晚清俠義小説創作的転  
 变 ..... 田 露

最初の挿倫訳介与軍国民意識的關係  
 ..... 羅文軍

早期《小説月報》与旧文学改良的終結 —  
 個於数拠統計和文体比較的分析

..... 侯運華

『中国現代文学研究叢刊』2010年第3期(総  
 第134期) 2010.5.15

女性在20世紀初期的文学翻譯成就 ... 郭延礼  
 女子問題与五四新文学の現代轉型 ... 張文娟

晚清的女性教化与女性想像

以《孽海花》為中心 ..... 劉 堃

“詩界革命”の新陣地

清末《大公報》詩歌研究 ..... 郭道平

渡辺浩司著 清末小説研究資料叢書12

### 清末民初翻譯短篇ミステリ論集

B5判 145頁 限定200部 定価：2,100円

イギリスの「碧斯東」とは誰のことでしょう  
 ですか? 「瑪黎瑟勒勃朗」は誰? 「埃  
 倫阿布瓦特」は? あの作家が中国では一  
 九一〇年代に早くも翻譯されていました。

卓越した頭脳を持つ「王登生」とは誰の  
 ことでしょうか? 「諾佛姆白喬」は誰?  
 「裘迭絲李」は? あの主人公が中国では  
 二十世紀初頭にすでに姿を見せていたの  
 です。

現在でも有名な作家・よく知られている  
 作品から、現在では有名とも言えない作  
 家・ほぼ忘れられている作品まで、翻譯シ  
 ョート・ストーリーのみをとりあげた稀有  
 な書物です。旧稿十一篇に書き下ろし一篇  
 を加え、もちろん旧稿の誤りは訂正し、さ  
 らに図をちょっと増やし、主な固有名詞の  
 索引も付けました。短篇作品の多様な姿を

どうぞお楽しみ下さい。

樽本照雄編 清末小説研究資料叢書13

### 商務印書館研究文献目録

B5判 166頁 限定200部 定価：3,150円

百年をこえる歴史を経てきた商務印書館  
 です。現代中国では有名な出版社のひとつ  
 であることに違いありません。

歴史が長いだけに遭遇した出来事も多種  
 多様なものがありました。なにしろ、日本  
 のある出版社と合併をした時期もあつたほ  
 どです。日中文化交流の側面からも興味深  
 いということが出来ます。

商務印書館を研究した専門書も当然なが  
 ら多く刊行されています。それぞれに参考  
 書、参考文献があげられているのが便利で  
 す。ただし、中国そのほかで出版された専  
 門書には、日本語文献にまで探索範囲をひ  
 ろげたものはほとんどありません。中国の  
 出版社のことですから、それも無理はない  
 でしょう。

しかし、日本の出版社と合併をした事実  
 を前にしては、漢語文献だけでは不十分で  
 あることは容易に理解できます。少なくと  
 も合併時期の商務印書館を視野におさめる  
 ならば、日本語文献を無視しては研究は成  
 立しないはずなのです。

### 『清末小説』第33号

試論晚清言情小説的特点 ..... 袁 進

『燈臺卒』をめぐる ..... 吳 燕

吳禱の漢訳チェーホフ ..... 樽本照雄

林訳小説《紅篋記》などの原作(下)

..... 渡辺浩司

吟邊燕語留餘韻 ..... 李 慶國

林紵与五四新文化派之爭史事編年

..... 張 俊才

刘鉄云的佚詩和几件联語 ..... 郭 長海

《消閑報》与連載小説之初起 ..... 何 宏玲

《<盛京時報>近代小説簡目》補遺

..... 張 永芳

商務印書館出版的立憲圖書 ..... 柳 和城

ほか